

建築と土木

田島泰氏をお招きして

2019.07.18 (木) @JIA 会館

1. はじめに

大高正人について、広く一般にはメタボリズム運動への参加、建築家でありながら都市計画分野でも建築界を牽引した人物として知られている。都市計画の分野は建築と土木の両方を扱う計画であるため、実際に、坂出人工土地や多摩ニュータウン、みなとみらい 21 地区の計画を見ると、建築と土木を融合させた計画を目指していたことが確認できる。そういった大高正人および大高建築設計事務所の仕事を今一度振り返り、建築と土木を考えることは非常に有意義なことではないだろうか。

今回は、大高建築設計事務所の OB である田島泰さんをお招きし、大高建築設計事務所での仕事やご経験を通して、建築と土木について語っていただいた。

2. 多摩ニュータウン

多摩ニュータウンは東京都稲城市・多摩市・八王子市・町田市にまたがる多摩丘陵に計画・開発された日本最大規模のニュータウンである。東京区部での深刻な住宅難は都市のスプロールを助長し、民間による無計画な宅地造成が進められていた中、そのような乱開発を防止するとともに、居住環境の良好な宅地を大量に供給することが目的とされ、東京都施行による土地区画整理事業で宅地造成が進められた。

当初、大高事務所には土木の技術者がおらず、本計画に合わせて UR の土木技術者、高橋賢一氏を事務所に呼びニュータウン計画を進めた。当時のスケッチを見ると、自然地形の中に住宅のクラスターを埋め込まれたイメージのもので自然地形や道路、建築物が一体となった計画が見て取れる。建築的な視点で土木的な領域に踏み込んだ提案であった。一方、土地区画整理事業は、道路や宅地造成など、いわゆる「土木」の部分を整備するものである。

「建築」は宅地造成後の敷地内の計画を進めるため、大高が描いたようなイメージを仕組み上整備することは困難であった。現在でも土地区画整理事業の仕組みとその運用は大きくは変わっていない。当時から土木と建築が一体となって提案したこのような豊かな景観が維持されていれば、また違った価値が生まれていたのではないかと考えさせられる。

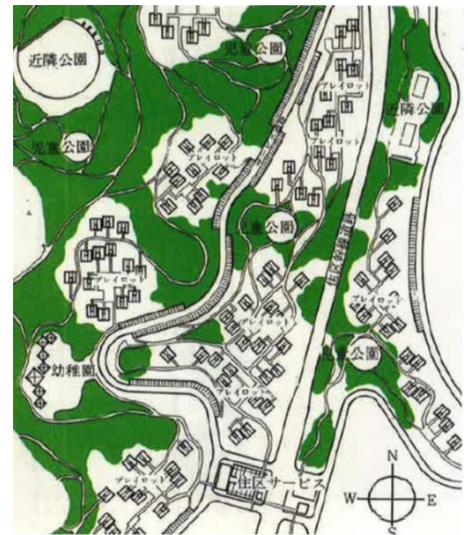


図 : 南多摩ニュータウン自然地形案
1966年～1969年

3. 人工土地（新宿、災害復興提案）

新宿では、鉄道上空の「人工土地」と複数の建築による「群造形」の創出を提唱した。「人工土地」の概念は現在も引き継がれ、東西新宿の連携強化を図るデッキ構想が進められている。まさに新たな土地を生み出すという思想を持っていた。

「人工土地」で有名なのは、坂出の事例である。上空レベルにコンクリートの人工土地を建設し、建替え住宅を建設、地上部は過去の建物を撤去し、将来のニーズのために空き地にしておくという二階建ての都市構想である。1972年には国交省の依頼による島根県江の川の浸水災害地の復興提案にも活用された。

2011年の東日本大震災後にも大高事務所OBより自治体へ再提案している。

新宿では都市部、江の川では地方部での「人工土地」の活用を通して、建築家としての社会的役割を示唆している。

3. 横浜 みなとみらい21地区

ニュータウンの実績に加え、URとの人脈もあり、新都市構想力を期待されて大高事務所が全面的に計画づくりに携わることとなった。マスタープラン委員会に参画し、都市基盤全体を構想。

NYなど海外の諸都市の影響もありガイドライン策定の機運が旺盛な時代にあり、MM21地区でも「街づくり基本協定」を策定。海への視線を意識した街区配置や建物高さ制限などが導入されている。

このマスタープランでは将来想定される建築物の絵を描き込んできたことが特徴。これは都市基盤側から建築側へのメッセージであり、実際、想定に近い形で建築がなされてきた。大高正人の言う「マスタープラン誘導型のまちづくり」が実現している。

また、彫刻家との協働もMM21地区の特徴のひとつ。大高正人は芸術家ともネットワークを持っていた。最上氏との協働は横浜美術館館長からの紹介で始まり、彫刻家を支える技術チームやスポンサー、公団等の多様な主体と連携してきた。都市軸のズレを巧妙にデザインに取り入れたり、風洞実験を行いビル風対策としての効果を証明して土地区画整理事業費の拠出を実現したりと、関係者の様々な工夫や努力の末に実現している。長い時間をかけて計画に関わり多様な人々の総合力で都市をつくってきたのである。

田島さんはMM21地区での大高正人との仕事を通じ、「1. 思ったことを成し遂げる行動力／2. 人脈、味方を増やす／3. 全てを一人で成し遂げようとしなない」ということの大切さを学んだという。



図：みなとみらい21マスタープラン
出典：みなとみらい21インフォメーション

4. 建築と〇〇

大高正人は自身の建築のテーマとして「PAU (Prefabrication, Art & Architecture, Urbanism)」を掲げていた。「A」や「U」は普遍のテーマだが、「P」は今の時代に合わない時代の先端のテクノロジーである。今の時代の「P」は、ICTを頂点としたテクノロジーではないかと田島さんはいう。

現在は他領域の融合が求められる時代であり、公共がつくる土木的インフラと民間がつくる建築的インフラは既に領域の重なりが大きくなり、融合してきている。「建築と〇〇」として関係性を問うフレームとしては、土木に限らず、伝統的には都市、交通、生物…などが挙げられるが、今後はICT等のテクノロジーと建築との関係性を考えることの重要性が高まっていると考えられる。建築の技術者も土木の技術者も「建築と〇〇」「土木と〇〇」をそれぞれ意識していくべきではないだろうか。

〇ゲスト経歴／田島泰氏

株式会社日本設計 都市計画群長 |
1959年 神奈川県横浜市生まれ
1984年 大高建築設計事務所 入所
2002年 田島都市建築研究所 設立
2005年 日本設計 入社

コーディネーター：大崎将大（日本設計）

記録：内山隆史（日建設計）

後記

今回は地方の市街地と自然の境界での建築と土木の協働の事例であり、今回は都市部の協働事例に展開してきた。次回も建築・土木の接点を探したい。